

~~~~~  
 研 究  
 ~~~~~

## 幼児への言語的対応における看護師の特性

—保育士との比較を通して—

和 田 久美子

### 〔論文要旨〕

本研究は、看護師、保育士の幼児に対応するときのことばの特性を明らかにする目的で行った。看護師、保育士が子どもと対応している場面を録音しそのことばの分析を行った。その結果以下のことが明らかになった。1. 看護師は、間接的要求表現である〈聞き手の状況〉を多く用いている。2. 看護師は、目標を示すために『目安』を用いることが多い。3. 保育士は、子どもが自主的に活動できるように、直接的な表現ではなく、間接的な表現で方向性を示している。4. 保育士は、子どもにとって自主的、主体的な活動につながるように『賞賛』を用いている。5. 幼児への言語的対応の特性として、看護師は「ケア指向的なことば」、保育士は「保育指向的なことば」を多く用いている。

Key words : 幼児, 看護師, 保育士, ことば

### I. はじめに

コミュニケーションとはお互いの情報を交換し合って意思疎通を図り、相互理解し、人間関係を成立させていくことである。子どもとのコミュニケーションにおいても同様であるが、子ども自身の言語能力が未熟であるためにその子どもの発達段階に合わせたコミュニケーション方法が必要となる。特に言語的な部分については、子どもが理解し、受け入れられることばを用いていくことが必要である。

子どもに関わる職種としての看護師、保育士でも、さまざまなコミュニケーションに関する研究が行われている。小児看護では、以下のような研究の結果が出されている。患児への採血場面の言葉がけは、子どもの不安を軽減させるために、発達段階の特徴や個別性を考慮したものであった<sup>1)</sup>。小児看護のエキスパートのわざ

としてわかろうとして関わる努力を重ねることで、子どもの状況を読み取ることができ、子どもとのつながりをつけて状況を共有し、子どもをくわがる<sup>2)</sup>ことができる<sup>2)</sup>。処置場面における年長幼児と看護師の関わりでは、処置遂行に対する働きかけとのバランスを保ちながら関わっていくこと、処置体験が前向きにとらえられるものとなるように関わっていくことであった<sup>3)</sup>。

保育では以下のような研究の結果が出されている。保育者の保育行動におけることばの有効性では、保育者は常に子どもを理解しようという観点からことばを発する必要性がある<sup>4)</sup>。保育者の子どもに対する言語的応答は、受容的方法と意図的方法がバランスよく混在し、子ども自身にまず考えたり判断したりする機会を与えている<sup>5)</sup>。また、保育者の言葉がけの変容により、幼児の遊び行動において有能感の高まりが

The Character of Language Used by Nurses When They Deal with Preschool Children

[1961]

— Through the Comparison with Nursery Teachers —

受付 07. 8. 28

Kumiko WADA

採用 08. 5. 1

聖徳大学大学院児童学研究科児童学専攻 (看護師)

別刷請求先: 和田久美子 聖徳大学大学院児童学研究科児童学専攻 〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬550

Tel : 047-365-1111 Fax : 047-363-1401

みられている<sup>6)</sup>。

以上のように言葉がけ、子どもとの関わり方、子どもへの影響というようにいろいろな視点で子どもとのコミュニケーションに対する方向性が示されている。しかし、具体的なことばを示したものは少ない。そこで、子どもとのコミュニケーションの要素の一つとしての「ことば」をどのように用いているかを明確にし、効果的な「子どもへの対応」につなげることが必要であると考えられる。本研究では、小児病棟で働く看護師のことばを考えるうえで子どもに関わる職種として、保育所で働く保育士のことばを比較のために取り上げる。看護場面は子どもをより健康な状態に導く「ケア」を目的にしている。たとえば、体を拭くということは決まっており、そのことを子どもが納得して行うことができるようにしていく。保育場面は、子どもを「育てる」ことを目的とした場面である。大きな決まりはあるにしてもそのためにどうするのかを子ども自身が考えていく状態を作り出していくことが多い。このような違いが、子どもに対する言語的対応に影響を与えられられる。看護場面での看護師と保育場面での保育士との幼児への言語的対応の特性を明らかにすることで、どのようなときにどのようなことばを用いているかを明らかにする。また、このことによって、子どもとのコミュニケーションを促進する要素の一部が明らかになると考えられる。

## II. 研究目的

看護師、保育士の幼児への言語的対応の特性を明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. データの収集の方法と期間

#### i 看護師のことば

2005年12月から2006年1月にかけて、研究協力を承諾した看護師がICレコーダーを身につけ、入院している子どもとの会話を録音した。実施期間については、小児看護に携わるようになってから1年以上たつことで病棟にも慣れ、子どもの発達や個性に応じた関わりができる時期であると考えた。看護師が幼児と日常生活援助などを通じて関わる場面を選び会話を録音し

た。対象となった幼児は2歳7か月から5歳8か月であった。時間は、1人、1日約2時間とした。時間帯は看護ケアや処置が多い9時から11時とした。看護師は、現在小児病棟で働く看護師経験3年以上、および小児看護経験1年以上の計5名であった。ペナーによる熟達の5つのレベルのうち一人前が2～3年の経験としていたことから<sup>7)</sup>、看護師経験を3年以上とした。対象者はすべて女性であった。

#### ii 保育士のことば

2004年3月から5月にかけて、承諾を得た保育所でビデオ撮影を行った。実施期間は、子どもが保育所に慣れた状況の中で行うことで本来もつ子どもとの関わりができる時期であると考えた。また、実施した保育所は、4～5月もほとんどの子どもが持ち上がりであったため大きな影響はないと考えた。時間帯は、保育活動が多く、午睡の妨げとならない午前9時ころから昼食終了までの約3時間半とした。遊びと食事の場面を中心とした。その他の場面として、移動場面、集団保育場面、朝の挨拶および点呼の場面などを含めた。撮影は、3歳児クラス4ヶ所、4歳児クラスと5歳児クラスは3ヶ所、保育士は計16名であった。撮影者は、子どもから話しかけられたときのみ応答した。対象者はすべて女性であった。対象とする保育士は、看護師と同じ3年以上の経験年数とした。

## 2. 分析方法

1人の子どもに対応している場面を逐語化した。データ全体に目を通した後に、ことばに着目し、ことばの類似性に従い、先行研究<sup>5,8-10)</sup>を参考にカテゴリー化をくり返し行った。【リード】のサブカテゴリー『終助詞(ね)』、『終助詞(よ)』、『問いかけ』については、さらに内容(コード)によって分類した。なお、データ分析の信頼性、妥当性を確認するために、主にカテゴリー間の比較・関連について小児看護の臨床経験を持ち、看護研究に関する見識を持つもの2名よりアドバイスを受け、さらに言語の研究者1名より全分析過程を通してスーパーバイズを受けた。

### 3. 倫理的配慮

実施にあたり、昭和大学保健医療学部倫理委員会の審査で承認を得た。研究の趣旨、自由意志の尊重、途中中止の権利の保障、匿名性の厳守、記録類の保管と処分方法、結果の開示方法、教育および学会発表を含む研究以外にデータを用いないことについて、看護師および入院している子どもの保護者には文書と口頭で説明し、署名により研究参加の同意を得た。同意を得た看護師が担当する子どもには、録音当日、録音開始前に口頭で説明し、その場で承諾を得た。また、保育士には文書と口頭、利用者の保護者には文書で説明し、署名により研究参加の同意を得た。同意を得た保育士の担当している子どもたちには、撮影当日、撮影開始前に担当保育士から撮影者の紹介と撮影についての説明を行い、承諾を得た。

### IV. ことばの定義

子どもに対することばはこれまでもさまざまな分類が行われている。宮原らは発問、過程、受容と3つに分類している<sup>8)</sup>。また、岩村らは限定的質問、明確化、解釈、説明の要求、受容の5つに分類している<sup>9)</sup>。楠本らは代弁、非指示的リード、情報の伝達、状況の説明、指示的リード、繰り返し、相手の注目の7つに分類している<sup>5)</sup>。これらを参考に保育士、看護師のことばを分類した。まず、使われていることばを形式で分類した。語尾に“ね”がつくものは『終助詞(ね)』、語尾に“よ”がつくものは『終助詞(よ)』、語尾が上がる形となるものはイントネーションにより判断し『問いかけ』とした。語尾が“～なさい”、“～してください”、“～してごらん”の形のものを『指示』とした。音声化して表現している語を『擬音語・擬態語』とした。幼児期に特有な語彙を『幼児語』とした。“ちょっと”、“少し”のことばを『目安』とした。“えらい”、“すごい”、“上手”、“かっこいい”を『賞賛』とした。子どもが言ったことをそのまま繰り返すことばを『繰り返し』とした。“がんばれ”を『励まし』とした。これらのことばがどのようなときに使われているかを分類し、3つのカテゴリーが抽出された。『終助詞(ね)』、『終助詞(よ)』、『問いかけ』、『指示』は、子

どもが次の行動に移るようなきっかけとして使われており、【リード】とした。『終助詞(ね)』、『終助詞(よ)』、『問いかけ』は、その内容からさらに分類した。『擬音語・擬態語』、『幼児語』、『目安』は、説明のときに内容の意図を伝えやすくするために使われており、【説明】とした。『賞賛』、『繰り返し』、『励まし』は、子どもの行動を認め、相手に注目するときに使われており、【相手への注目】とした。ことばの定義については表1に示した。

### V. 結果(表2参照)

#### 1. 看護師の言語的対応

看護師は、【リード】が最も多く、次いで【説明】、【相手への注目】となっていた。【リード】の中では、『問いかけ』、『終助詞(ね)』が多かった。『問いかけ』、『終助詞(ね)』の内容では、<投げかけ>が多くみられた。『終助詞(ね)』では「お体拭こうね」、『問いかけ』では「お体拭きましょうか?」というような話し方であった。『終助詞(よ)』では<投げかけ>が多く、「ご飯の時間だよ」というような話し方であった。『指示』的なことばも使われていた。「ゴロンしてごらん」、「ゴロンしてください」というような話し方であった。【説明】の中の『目安』も多くみられる。「もう少し」、「ちょっと」であった。また、【相手への注目】の中では、『賞賛』が最も多く、「えらかった」などであった。

#### 2. 保育士の言語的対応

保育場面全体としては、【リード】が最も多く、次いで【相手への注目】、【説明】となっていた。【リード】のなかでは、『問いかけ』、『終助詞(よ)』が多かった。『問いかけ』の内容では、<投げかけ>、<確認>がほとんどであった。<投げかけ>は次の行動を促すために「誰が上手にできるかな?」、<確認>はお話を聞いていないときに「聞いていますか?」という言い方であった。『終助詞(よ)』の中では、<投げかけ>が多くみられた。危険なときに「危ないよ」という言い方であった。『終助詞(ね)』の中でも、<投げかけ>が多くみられた。「これはなんだろうね」という言い方であった。【説明】の中では『擬音語・擬態語』が多くみられた。「ピ

表1 ことばの定義

カテゴリー		サブカテゴリー		コード	
【リ ド】	子どもに対して次の行動に移るためのきっかけとなるようなことば	【終助詞(ね)】	語尾に“ね”がつくもの	<投げかけ>	子どもに対して次の行動や考えの方向性を示すことば
				<確認>	子どもに対して意図する内容が伝わっているかまたは子どもの示している内容が何かを確認するためのことば
				<促し>	子どもに対して次の行動や考えを指し示すことば
				<念押し>	子どもに対して意図する内容を再度伝えるためのことば
				<受容>	子どもの示した行動や考えを受け入れるためのことば
		【終助詞(よ)】	語尾に“よ”がつくもの	<投げかけ>	子どもに対して次の行動や考えの方向性を示すことば
				<確認>	子どもに対して意図する内容が伝わっているかまたは子どもの示している内容が何かを確認するためのことば
				<促し>	子どもに対して次の行動や考えを指し示すことば
				<念押し>	子どもに対して意図する内容を再度伝えるためのことば
				<受容>	子どもの示した行動や考えを受け入れるためのことば
		【問いかけ】	語尾が上がる形となるもの (～なの? ～でもいい? ～させてもらえる?など)	<投げかけ>	子どもに対して次の行動や考えの方向性を示すことば
				<確認>	子どもに対して意図する内容が伝わっているかまたは子どもの示している内容が何かを確認するためのことば
				<話し手の目標>	間接的に話し手の目標を示すことで要求することば
				<話し手の状況>	間接的に話し手の状況を示すことで要求することば
				<聞き手への期待>	間接的に聞き手への期待を示すことで要求することば
<聞き手の状況>	間接的に聞き手への状況を示すことで要求することば				
<聞き手の協力>	間接的に聞き手への協力を示すことで要求することば				
【指示】	はっきりと方向を示すことば (～しなさい ～ごらん)				
【説明】	説明のときに内容の意図を伝えやすくすることば	【擬音語・擬態語】	音声化して表現している語		
		【幼児語】	幼児期に特有なことば (プーブー まんまなど)		
		【目安】	目安を示すことば (ちょっと 少し)		
【相手への注目】	子どもの行動を認め、相手に注目するときのことば	【賞賛】	ほめることば(えらい すごい 上手 かつこいい)		
		【繰り返し】	子どもが言ったことをそのまま繰り返すことば		
		【励まし】	子どもを励ますことば (がんばれ)		

【 】カテゴリー  
「 」サブカテゴリー  
< >コード(内容)  
( )内は例

カピカ」、「モグモグ」というように用いられた。また、【相手への注目】では、『賞賛』が最も多く、「えらい」、「かつこいい」などであった。

3. 看護師と保育士の言語的対応の特性

保育士と看護師の言語的対応の差異を検討するために $\chi^2$ 検定を行った。『終助詞(ね)』では、<促し>(  $\chi^2(1)=8.285, p < .01$  ), <念押し>(  $\chi^2(1)=13.001, p < .01$  ), <受容>(  $\chi^2(1)=$

表2 幼児への言語的対応

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	看護場面				保育場面				χ <sup>2</sup> 値 (df = 1)	
			n (n = 1219)		%		n (n = 504)		%		n	
リード	終助詞 (ね)	投げかけ	264	141	21.7%	11.6%	90	45	17.9%	8.9%	n.s.	n.s.
		確認		0		0.0%		7		1.4%		n.s.
		促し		3		0.2%		6		1.2%		8.285 **
		念押し		27		2.2%		23		4.6%		13.001 **
		受容		93		7.6%		9		1.8%		20.825 **
	終助詞 (よ)	投げかけ	180	126	14.8%	10.3%	120	71	23.8%	14.1%	20.279 **	n.s.
		確認		0		0.0%		5		1.0%		n.s.
		促し		15		1.2%		20		4.0%		4.852 **
		念押し		17		1.4%		14		2.8%		n.s.
		受容		22		1.8%		10		8.3%		n.s.
	問いかけ	投げかけ	420	184	34.5%	15.1%	158	92	31.3%	18.3%	n.s.	n.s.
		確認		176		14.4%		61		12.1%		n.s.
		話し手の目標		0		0.0%		2		0.4%		n.s.
		話し手の状況		0		0.0%		0		0.0%		n.s.
		聞き手への期待		0		0.0%		0		0.0%		n.s.
		聞き手の状況		7		0.6%		0		0.0%		n.s.
		聞き手の協力		53		4.3%		3		0.6%		15.968 **
	指示	23	1.9%	18	3.6%	n.s.						
	説明	擬音語・擬態語	74	6.1%	21	4.2%	n.s.					
		幼児語	25	2.1%	12	2.4%	n.s.					
		目安	162	13.3%	7	1.4%	57.086 **					
相手への注目	賞賛	34	2.8%	73	14.5%	83.732 **						
	繰り返し	21	1.7%	3	0.6%	n.s.						
	励まし	16	1.3%	2	0.4%	n.s.						

p < 0.05 \*  
p < 0.01 \*\*

20.825,  $p < .01$ ) にことばの偏りが有意であった。『終助詞 (ね)』では、<促し>、<念押し>は保育士に多く、<受容>は、看護場面に多かった。『終助詞 (よ)』では、『終助詞 (よ)』 ( $\chi^2(1)=20.279, p < .01$ ) そのものが保育士に多く、有意に偏っていた。そのなかでも特に『終助詞 (よ)』の<促し> ( $\chi^2(1)=4.852, p < .01$ ) が保育士に多く、ことばの偏りが有意であった。『問いかけ』では、<聞き手の協力> ( $\chi^2(1)=15.968, p < .01$ ) を使っていることが、看護師に多く、有意に偏っていた。【説明】では、『目安』 ( $\chi^2(1)=57.086, p < .01$ ) を使っていることが看護師に多く、有意に偏っていた。「もう少し」、「ちょっと」ということばである。【相手への注目】では、『賞賛』 ( $\chi^2(1)=83.732, p < .01$ ) を使っていることが保育士に多く、「すごい」、「えらい」などが有意に偏っていた。

## VI. 考 察

### 1. 看護師の言語的対応

看護師は、【リード】の中では、どのサブカテゴリーでも<投げかけ>を圧倒的に多く用いている。『終助詞 (ね)』、『終助詞 (よ)』ともに<確認>の形では用いられていない。これは、<投げかけ>のかたちで、その中にある方向を示唆していることばとして使われている。「お体を拭こうね。」というようなことばである。また、サブカテゴリーの『問いかけ』では、間接的要求表現としての<聞き手の協力>も用いられていた。「体拭き、させてもらえる？」というようなことばである。間接的要求は、目標指向的な会話の中で使われることが多い<sup>12)</sup>。また、『終助詞 (ね)』が、『終助詞 (よ)』よりも多く用いられている。『終助詞 (ね)』は、主張

を弱める機能があり、共感的な説得や親密な会話場面に出現しやすい<sup>13)</sup>。入院している子どもに関わるときには主張を弱め、共感的なほうが受け入れやすいと考えられる。『終助詞(ね)』では、〈受容〉という形で使っていることが多く、『終助詞(ね)』は、幼児のことは受け止める用い方をしていた。【説明】では、『目安』が多く、『擬音語・擬態語』、『幼児語』と続いた。育児語は、幼児とモノとの出会いを助けようとする特質を持つ<sup>14)</sup>。『目安』は、「もう、ちょっとだよ」、「おしまい」というようなことばであり、目標を示すためのことばである。しかし、これらの表現は抽象的であるため、具体的に「時計の針がここまで来たとき」、「〇〇が終わったら」というような表現が必要であると考えられる。採血場面での患児への看護師からの言葉がけの分析では、「状況を説明する」のカテゴリーが多かった<sup>1)</sup>。これは、『目安』とほぼ同じ内容のものである。これらのことばは、幼児が物事をイメージするときに想起しやすいことばである。特に看護場面では、日常生活とは違う状況が多く、子どもがイメージしにくいことから不安や恐怖を生むことがある。そういう点においても【説明】が多く用いられる。状況を説明することは、子どもの意志を尊重し、子どもの尊厳を守る行為である<sup>1)</sup>ことから看護場面においては重要なことばである。また、『擬音語・擬態語』も、【説明】として多く用いられていた。「聴覚映像と概念、記号表現と記号内容との関係が成立してことばの開始になる。その記号関係の成立にとって重要なのは、両者にまたがる性質を有する擬声・擬態語である」<sup>14)</sup>。このように『擬音語・擬態語』は、幼児が物事を理解するときに重要な役割を果たすという意味では、看護師で多く使用されることも当然である。【相手への注目】については、全体の割合としては少なかった。子どもに関わるときには、必ず教育・養育という部分を念頭に置くべきであろう。看護の日常生活援助場面においても子どもの行動を認めることばを多く使っていくことが必要である。

看護場面は、何かをすることに導く「ケア場面」が多く、「ケア指向的なことば(看護としての目標指向的、場面即応的なことば)」を多

く用いている。子どもの気持ちを受け入れながら方向性を示し、援助に結びつけていけることばを用いていると考える。

## 2. 保育士の言語的対応

保育士は、【リード】のなかでは、どのサブカテゴリーでも〈投げかけ〉を多く用いていた。また、『終助詞(ね)』と『終助詞(よ)』ともに〈促し〉、〈投げかけ〉、〈念押し〉、〈確認〉の形で用いられていた。文末に“よ”をつけることで、“ね”をつけるときよりも聞き手に強く示される<sup>13)</sup>。また、“ね”は文脈を弱める<sup>13)</sup>。保育士は、同じことを伝える場合、子どもに対して強く伝えたいときには“よ”を使っているといえる。また、“ね”を使うことで子どもが受け入れやすく、考える機会を与えることができると推察できる。『問いかけ』は、【リード】の中では最も多く使われていた。これも子どもが自分で考える機会として用いられているといえる。保育は、保育所保育指針によると、「子どもの自発的、主体的な活動を保育士が援助することにより、望まれる心情、意欲、態度を子どもが身につけること」を目標のひとつとしている<sup>15)</sup>。このように、子どもの自発的、主体的な活動を援助する意味からも【リード】のカテゴリーでは、どの部分からも〈投げかけ〉という形で用いられている。【説明】は、全体としては多く用いられていなかった。それは、日常生活としての場面が多いことから子どもがわからない状態は少ないためであろう。加えて、集団の場での説明場面が多く、今回の調査は1対1の対応場面としたために少なかったと考えられる。【相手への注目】では、保育士は子どもを認めることを示すために『賞賛』、『繰り返し』、『励まし』のことばを使っていた。『賞賛』では、「かっこいい」、「上手」、「えらい」などである。『繰り返し』は、子どものことばに対してしっかりと同じことばで返すことで子どものことばを受け取っている。『励まし』では、子どもが自信を持って行動できるようにしている。自発的、主体的な活動をしていくために『賞賛』が多く使われていたと考えられる。幼児を認めることが幼児の認知として有能感が高まり、自己効力感を高め、内発的動機が生じ

る<sup>6)</sup>。『賞賛』は、子どもが自分から行動できるように子どもが安心できる状況として必要であり、子どもの行動や思いをきちんと受け止めることばが自発的、主体的活動につながるといえる。

保育場面は、大きな方向性に向けて子どもを「育てる」場面であり、「保育指向的なことば(目標指向的ではあるが保育という大きな枠の中でのことば)」を多く用いている。子どもを「育てる」ということから、子ども自身が自主的、主体的に行動できるように子ども自身が考えることができることばを多く用いている。

### 3. 看護師と保育士の言語的対応の特性

看護師では、『終助詞(ね)』の<受容>、『問いかけ』の<聞き手の協力>というような間接的表現を用いることが多かった。また、強い印象のある『終助詞(よ)』は、保育場面に比べて用いられることが少なかった。これは、看護では、信頼関係を築いた後に行うというよりも築きながら援助していくことが多いために、子どもが受け入れやすいやわらかいことばで接する必要があると考えられる。また、看護として行うべき目標があることから目標指向的なことばの用い方をしていると考えられる。【説明】の『目安』が多く用いられていることもこのことに関連したことである。保育士では、『終助詞(ね)』、『終助詞(よ)』ともに<促し>を、『終助詞(ね)』では、<念押し>を意味する用い方が多くなっていた。保育所では、基本的生活習慣の確立などの援助が主体であり、<促し>、<念押し>が多くなると考えられる。しかし、直接的な『指示』ではなく、子どもが自主的に活動できるような表現としている。保育士は、子どもが自主的、主体的に活動できるように連想的なことばの用い方をしていた。また、【相手への注目】の『賞賛』が多く用いられていた。保育士のことばは、子どもを『賞賛』することで子ども自身を認めることにつながり、子どもの自主的、主体的な活動になると考えられる。

ことばの用い方は、それぞれの場面で、子どもにどのような働きかけが必要であるかによって大きな違いがみられている。看護は、「ケア」が中心の場面であり、一つのことに直接的に結

び付けていくように導いていく。保育は、「育てること」が中心の場面であり、大きな方向に導いていく。このような違いがことばの用い方に表れているといえる。

## VII. 結 論

1. 看護師は、間接的要求表現である<聞き手の状況>を多く用いている。
2. 看護師は、目標を示すために『目安』を用いることが多い。
3. 保育士は、子どもが自主的に活動できるように、直接的な表現ではなく、間接的な表現で方向性を示している。
4. 保育士は、子どもにとって自主的、主体的な活動につながるように『賞賛』を用いている。
5. 幼児への言語的対応の特性として、看護師は「ケア指向的なことば」、保育士は「保育指向的なことば」を多く用いている。

この研究にあたり、研究指導をいただいた福沢周亮先生、調査にご協力くださいました看護師、保育士、お子様とその保護者、施設の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究は第53回日本小児保健学会、日本小児看護学会第17回学術集会において、一部発表した。

## 文 献

- 1) 原田千枝, 吉野真理, 矢野和代, 他. 患児への看護婦からの言葉がけの分析. 第27回日本看護学会集録(小児看護) 1996: 29-31.
- 2) 添田啓子. 小児看護臨床実践における対象理解と関係の持ち方に関する研究—幼児後期を対象とした臨床実践の4つのタイプから—, 聖路加看護学会誌 1998; 2 (1): 31-38.
- 3) 鈴木里利. 処置場面における年長幼児と看護婦の関わり—第1報: 看護婦の関わり—の要素, 聖路加看護大学紀要 2001; 27: 10-25.
- 4) 小川清実. 保育者の保育行動におけることばの有効性をめぐって—状況に応じたことばがけの条件, 日本保育学会大会発表論文抄録 1998; 51: 274-275.
- 5) 榎本千里, 山崎 晃. 子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性—担任保育者と

- 教育実習生を比較して一. 保育学研究 2002 ; 140 (2) : 90-96.
- 6) 岡澤哲子. 保育者の言葉がけが幼児の遊び行動におよぼす影響について一有能感を高める試みを通して一. 名古屋学芸大学短期大学部研究紀要 2004 ; 1 : 133-140.
- 7) Patricia Benner. 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳. ベナー看護論 達人ナースの卓越性とパワー. 医学書院. 2000.
- 8) 宮原英種, 宮原和子. 応答的保育の研究 初版 京都 : ナカニシ出版, 2002 : 29-54.
- 9) 岩村 聡, 小柳晴生. ファシリテータ発言分類法作成の試み 広島大学総合科学部紀要Ⅲ 1984 ; 8 : 95-113.
- 10) 仲真紀子, 無藤 隆. 間接的要求の理解における文脈の効果. 教育心理学研究 1983 ; 31 (3) : 10-16.
- 11) 関 祇英. 擬音語・擬態語の研究. 名古屋大学人文学研究 1997 ; 26 : 77-100.
- 12) 内田伸子, 編. 新・児童心理学講座 6 言語機能の発達 初版 東京 : 金子書房, 1990 : 51-182.
- 13) 綿卷 徹. 終助詞「ね」と人・関係指向の会話一自閉症児の会話分析と座談会の会話分析から. 国文学 : 解釈と教材の研究 2003 ; 48 (12) : 78-85.
- 14) 友定賢治. 生活語彙の開く世界 4 育児語の開く世界 初版 大阪 : 和泉書院, 2005 : 1-117.

- 15) 厚生省. 保育所保育指針 初版 東京 : フレーベル館, 1999 : 4-11.

### [Summary]

This research sought to clarify the character of language used by nurses and nursery teachers when they deal with preschool children. We recorded settings where nurses and nursery teachers dealt with children and analyzed the language they used. As a result, the following points became apparent. 1. In nursing settings, nurses often use goal-oriented language ; they often use "the condition of the listener", which is a form of expressing indirect requests. 2. In nursing settings, nurses often use "guidelines" to help the child envision a goal. 3. In childcare settings, nursery teachers are oriented toward indirect expressions and not direct expressions to make the child act voluntarily. 4. In childcare settings, nursery teachers use "praise" to lead to voluntary, independent action by the child. 5. When dealing with children, nurses often use "care-oriented language" while nursery teachers often use "bringing up children-oriented language."

### [Key words]

preschool children, nurse, nursery teacher, language